



宇治拾遺物語

八

^ 12
4108
8



利
4108
15-8

4108
8

宇治拾遺物語卷第八目錄

一 大膳大史たいぜんのだいし以こまおがせんぐ長なが家か近ぢん同どう事こと

二 下しも折ま武ぶ正せい大だい風ふう雨う月げつ奈な法ぽう性じやう与よ致ぢ事こと

三 信しん濃のう至し野の事こと

四 敏みん行ぎやう胡こ名な事こと

五 東とう大だい寺じ花け巖がん會かい此こ事こと

六 猥わい師し佛ぶつと射い事こと

七 千せん子し院いん僧そう心しん仙せん人にんとああ事こと



宇治拾遺物語

二

出づるありし車を遣ふして法車にむして牛を
つたさしつて榻たのふもとをさしてとさす
すまをてし礼を中のみさす礼は人車さす
へいとも志ありしむきてさすせても
を礼節としていふまでを礼をさすは
を法節としていふまでを礼をさすは
がとせしむりいふまでを礼をさすは
いふまでを礼をさすは
以去年老いよむれをさすは
まはた大に教つていふまでを礼をさすは
あれは方母のふまをさすは

世とよき世行をれでいふあるさすは
ずるむらにさすは
是しを今いむら下野武をさすは
大風大のありて京中れをさすは
と乗教よむらさすは
さすは
のうれをさすは
くむらさすは
を法節としていふまでを礼をさすは
ふむらさすは
を法節としていふまでを礼をさすは

法節

二



今とむり。伝濃は法師ありきりさあ田舎にて
 法師は女よをれがまゝ受戒もそらうて京にのが
 きて東大寺といふありて受戒をんと思てとあう
 て乃ゆわらふ受戒志くあり。さてちも乃あへん
 とわりの事いどもいふ。いふ事傳をいふ
 あるは乃ゆりしあにわんと思ふは法師を東大
 寺に仏乃法師といふては法師の坊にのどをり
 復ねんをああといふ。乃ゆら底を見さす。を
 一の坤乃といふあり。いふをわんをむにわ
 けいふ。いふといふて行く。乃ゆはをいふ
 かくあてをわにいふ。乃ゆはわいをわの耐

おぼたかおのりいんやそり田沙門してそおら
まきあうこにらひさた出雲杖をてくもへをり
くそものつとまおのりく年月ちるわにたふ山お
兼子い下も他人ありあうとにた乃許も
はらよ飛経は物入くたまるも大なるあを念の
あふけあをて物もつにわとにた乃許あま
まい乃物あよたさける杖まの乃許まよあり
あしくゆははた許よとてまもて念入まよ
志ををまてとたよ物もい進まわをれし許の物
かまよりけふかたに物も志つめもてつ許を
まをれく物もい進はまわもいごまて念入も

まして遊戯りぬるやどにたさうりあつて、た念
まはまよまくとせまぶいふまくとんまてくわ
よゆまててまよ一尺斗ゆるたあまをた
あまのぬるまをてあ念一あてままの念
くあつてはる許まをまれくまてそにぬぬる
ままの志まよいもぬとまおまの乃許ま
まらしてつ許まを乃つてまらまはた念
よ二丈まららるまをてありほまよまの
まらあまままあぬのり、た乃ままま
まらまらまあぬまよ乃念まらまら
まらまらまらまらまらまらまらまら

ち乃しとていふにゆるしんこつんとふ人全あるや
そにねもむしとていふにゆるしんこつんとふ人全あるや
人全ゆるしんこつんとていふにゆるしんこつんとふ人全あるや
とていふにゆるしんこつんとていふにゆるしんこつんとふ人全あるや
とていふにゆるしんこつんとていふにゆるしんこつんとふ人全あるや
とていふにゆるしんこつんとていふにゆるしんこつんとふ人全あるや
とていふにゆるしんこつんとていふにゆるしんこつんとふ人全あるや
とていふにゆるしんこつんとていふにゆるしんこつんとふ人全あるや
とていふにゆるしんこつんとていふにゆるしんこつんとふ人全あるや
とていふにゆるしんこつんとていふにゆるしんこつんとふ人全あるや

申れりて城の人全りまをさしつていふにゆるしんこつんとふ人全あるや
雲をぬきしとていふにゆるしんこつんとていふにゆるしんこつんとふ人全あるや
まをさしつていふにゆるしんこつんとていふにゆるしんこつんとふ人全あるや
私んこつんとていふにゆるしんこつんとていふにゆるしんこつんとふ人全あるや
信濃ありしとていふにゆるしんこつんとていふにゆるしんこつんとふ人全あるや
まをさしつていふにゆるしんこつんとていふにゆるしんこつんとふ人全あるや
まをさしつていふにゆるしんこつんとていふにゆるしんこつんとふ人全あるや
まをさしつていふにゆるしんこつんとていふにゆるしんこつんとふ人全あるや
まをさしつていふにゆるしんこつんとていふにゆるしんこつんとふ人全あるや
まをさしつていふにゆるしんこつんとていふにゆるしんこつんとふ人全あるや

めく引たるはくそつたを家斗乃人をもつて
尸ともかくせよ跡行人きりあつたしぬい
思くわらめくわい人のあまきつらぬるま
乃あなまのら母のわらめくわらぬれぬれ
と人たつたはつたはつたはつたはつたは
うもつたはつたはつたはつたはつたは
つたはつたはつたはつたはつたはつたは
つたはつたはつたはつたはつたはつたは
つたはつたはつたはつたはつたはつたは
つたはつたはつたはつたはつたはつたは
つたはつたはつたはつたはつたはつたは
つたはつたはつたはつたはつたはつたは

くちうと事をもつたはつたはつたはつたは
むくもくもくもくもくもくもくもくもく
乃眼をそれしつたはつたはつたはつたは
初ひらあど乃あつたはつたはつたはつたは
軍れようひん胃もつたはつたはつたはつたは
二百人むらあつたはつたはつたはつたは
布ぬるもつたはつたはつたはつたはつたは
つたはつたはつたはつたはつたはつたは
めくあつたはつたはつたはつたはつたは
ぬりあつたはつたはつたはつたはつたは
つたはつたはつたはつたはつたはつたは

花嚴經と云ふ。則講説乃あひて梵語と云ふは法華
此中間よその序よりて惣しやうようせせりぬ又つてくく懸けんを
ふ飛と杖ていと云らして懸けんをうあふま懸けん乃杖八十別べつ處じよ
て八十花嚴經とある件乃杖の本大佛殿内東回廊の
ありは法華序の惣よ杖系杖あられ白椿乃本也今伽藍
乃さうかちつんとすんは志さうびくあの本さう枯とい
ぬ乃今此講師と乃法華でても中間よその序よりなりて
後さうあつて法華を法華にして法華事あれをまぬ
ぬさうは懸乃杖の本三十四年うさ杖とて法華のま
くさうあつて乃法華杖本とて序よりつて杖をさう
家けはさうよ法華をさうぬせ乃まう白椿りなり

昔あつて乃山よ久くかこあふ取あわまの法華
て坊といつて事か西のこは彌師ありけ取と
くゆきとて法華よいまうて物めてさうりさうあ
むさくまはとをれは餅もち杖本干飯かはんをさう入いてま
でさうり所候て日は乃あがはれさあどれあふさ乃
中よおりのての法華うぬあ乃福いさうくくあうとさ事
ありけ年よ本代念のく経きやうとてあつてつちりてある
志しる一序りんさ乃夜は普賢ふけん并なら衆しゆありてみ
法ほふこよいさう梅りておる人あつていふたれあ乃
桶師よあつてさうとさ事よさういふたれさういふ梅り
ておがみまらんとしてさう梅りぬさうて法華はさう量りやうの

あゝ母とふ言乃きまふ庭ういりある事なやその
まじ色け仙をたてたがえまつせぬりなとて人童の
又六座をえんめてまつりてゆいりかゝ穢所我も人
らゝまひる事をやあゝとておとらうらゝのねも
きまうておきおらり九月廿日見事なる夜の事
しゆもくしは夜半のねんと思ふかぞに東
すん山乃衆より月乃出る金うみみては夜人嵐
も冷しきまゝ乃坊内えさうへるやうらゝわか
まらぬこれえ普賢并白象と業て海くわう
て坊のあゝえは強なりをさくくはるんくいつはぬ
あゝかゝみまゆるやとつひをれいりくま乃童しかり

あゝとていみじうたうらゝ穢所見をう
まゝの清経をききもらひ強かへるこゝれ目ぐりり
みく経をあげ喜止まの所をへ強乃しきこゆらかこも
とらぬまみと強へるかゆまゝこれね事とてかかたり
みねもいりけ事かこてんあま罪うへきま事よ
あゝとておもしろいてとらと矢強りうは強かいて聖
れかみ入くゆるう人よりさう強かてちとつよふ強か
ひやうと村たりをれえは強乃をどよあゝとら
うて火をうらゝ系流あゝくうてえもうせぬあゝ
とらあゝきこし強かたもとて強かあまはいりり
つらとていいてなきまもふ事強かり男やけら

五十四

五十四



聖にれ月ようそをみる終えめうん終えあけきしこの月
 みんて終へて心をなるとして対つるあり海に
 乃佛あははよして矢かめら終つてされあやト
 き物ありといわれきり。夜あきそて血をこめてけて
 見えぬがし一町をうりけて谷乃うとに大なる獵胸
 よりこがのしをを射とをさなく死てふきりもを
 されし。無智あるれかやうにさるされきるるなり。獵師
 けいさごて愚ありたれの獵を射害るれをけを
 あらまうける也

むいふ山乃西塔千手院の住持を尋ね侍を
召さし座に就けしに侍曰く此僧は
かゝるありて侍曰くあり侍に
とみけり陽勝仙人とや仙人云く
をさする侍乃陀羅尼乃ふを
乃ちと本れう人は君路ぬ侍
その侍のまれを蚊乃と念
屋の侍の仙人とて侍あり
羅尼乃ある侍を侍と侍あり
をまれ侍は侍あり侍あり侍あり
侍ぬ侍乃物語して侍あり侍あり侍あり

人きよまを侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍
侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍
侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍
侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍
侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍
侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍
侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍
侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍
侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍
侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍
侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍

侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍侍

